

5. む す び

人力田植機利用の意義は、調査地区のように複合経営で、しかも水田規模の小さな場合には、田植機という資本財の新たな投資からみれば雇用労働排除という直接的経済効果は大きくないが、作業に計画性をもたせうることで、さらに自家労働力で各作業が適期に行なわれるという経営的効果は経済的効果以上に大きいことを指摘した。

以上のことから、人力田植機が経営の合理化に果た

す機能は大きく、それだけ定着性が高くなっている。

しかし、本質的に同じ機能をもつ動力田植機については、阿武隈山系のように山間複合経営地帯において小区画、棚田、農道の未整備など人力田植機に比べ動力田植機の適応条件は悪く、効率の高い利用は期待できない。また、経済的に資本投下が大きく個別利用では費用負担の増大をもたらすこと、自然的条件および経営的條件から集団利用をはかることは困難であると考えられることなどから、動力田植機よりも人力田植機の利用が経営的にみて好ましいと考えられる。

水田地帯農家の家事作業の実態

—— 家事時間と家事分担 ——

佐 藤 チ セ

(東北農試)

1. ま え が き

生産と生活が未分離な状態にある現実の農家では、生産が常に優先し、家事は二次的にならざるを得ない。すなわち、まず農業労働が合理化され、しかる後に家事生活の向上がはかれる。

ところで、農業生産では機械の導入ならびに栽培技術の進歩により、労働の合理化が著しく進行している。一方、消費生活も向上し、東北の1戸当り農家所得(名目)は10年前に比較し、約2.9倍、家計支出は2.6倍に上昇し、また耐久消費財の導入も著しく伸びている。しかし、農家所得に占める農外所得の割合は、東北では43年度40%にたっている。これは全国平均より若干低い、東北でも農外所得への依存をますます強めている。

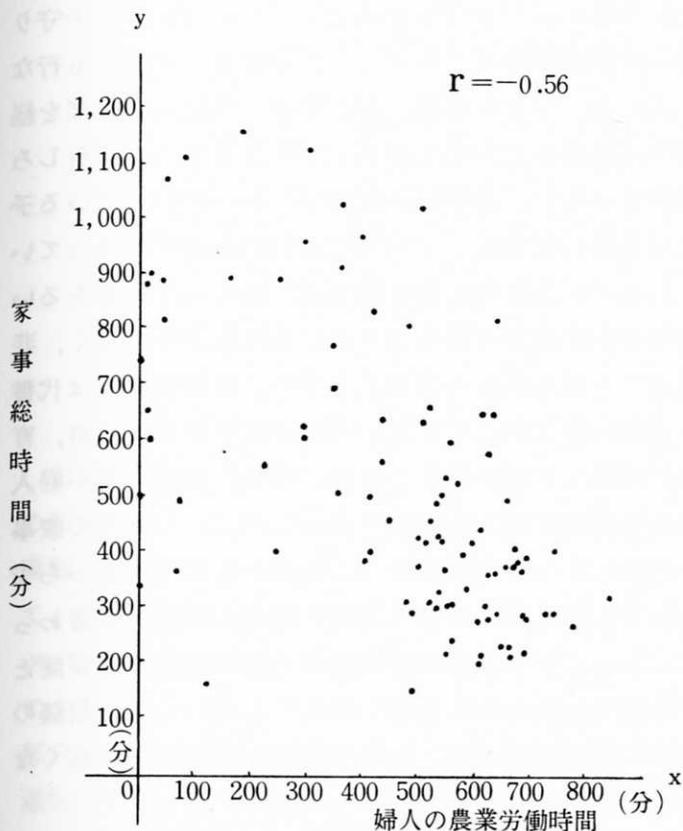
このような消費支出の伸びを支えるために、また一方農業機械、施設などへの支出補填のために、最近主婦、嫁の出稼ぎ、日雇が増加し、また安い労働力を求めて農村地帯に進出する工場がふえ、農閑期には若妻たちがこれらの工場へパートタイマーとして通勤するものが増加している。農業生産は省力化されても、婦人の余剰時間、農閑期の休養時間は家事の充実には向けら

れず、兼業に向けられている現状にある。したがって、農家の家事は農作業との関連でどう行なわれているのであろうか、というのがここでの課題である。

この報告は昭和41年から43年にわたって、岩手県農試経営部などと共同で行なった「水田単作地帯における農家労働の合理化に関する研究」の一部をなすものである。岩手県胆沢町南都田の農家14戸を対象として、耕起、田植、水田除草、夏期農閑期、稲刈、脱穀、冬期農閑期の7回にわたって、家族全員の生活時間を中心に、農業、生活全般にわたる調査を行なった。

2. 家事時間を規制する要因

一口に家事といっても、その内容は炊事、掃除、育児など種々な作業から構成されていることはいうまでもない。しかも毎日しなければならないもの、隔日にしてよいもの、また裁縫のようにある時期にまとめてしてよいものなどが含まれていて、作業のしかたもそれぞれに異なっている。婦人の農業労働時間との関係で、これらを含めた家事時間とをみると(第1図)両者の間にかんがりの相関($r=-0.56$)があることが確認される。このことは農家の家事時間は農業労働に大き



第1図 婦人の農業労働時間と家事総時間

く影響されていることを示している。もちろん、家事作業は家族員を対象に行なう場合が多いから、その家族員の構成によっても時間は異なってくる。これを農家別にみると、乳幼児がいて農繁期でも子守り専従者のいる農家は各作業期とも相対的に時間が多く、大人揃いで家族構成も単純な農家は相対的に時間が少なくなっている。つまり家事時間はファミリーサイクルと深い関係があり、乳幼児がいる期間はその分だけ家事が長くなる。

3. 家事の緊要度

家事作業は農業労働によって影響をうけるから、農作業の繁閑によって炊事、裁縫などの出現頻度、消費時間は異なる。たとえば脱穀期には家事時間が最も減少するが、炊事および風呂作業では出現度、時間は他の作業期と変りない。育児の出現度も他の作業期と同じであるが、時間は若干短縮される。掃除では時間は縮小しないが、出現度が稀薄となり、洗濯は時間、頻度ともに縮小する。さらに裁縫のように不急なものはほとんど現われない。これに対し、冬期農閑期は農作業からの規制をうけることがなくなるので、裁縫が激増し、掃除、洗濯などの出現度も若干高くなり時間も増加してくる。

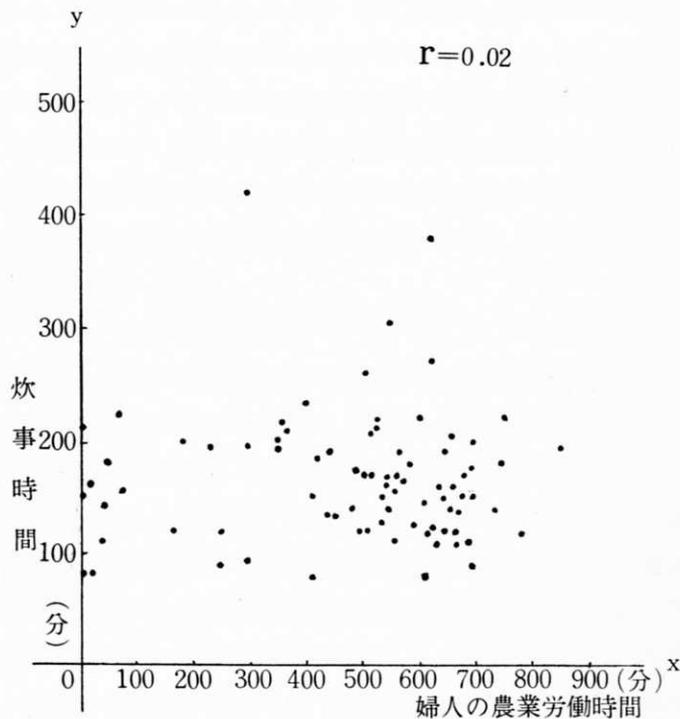
このように家事は農作業の繁閑によって、また家事

それぞれの性質によって時間および出現度が異なるのであるが、脱穀期にみられた以上のような実態は、農家の必要な最低時間で家事の緊要度ともいえるものであると思われる。

次に、婦人の農業労働時間のみならず、家族構成、家事担当者などによって、これら家事作業時間が如何なる影響をうけているかについてみる。

4. 主要な家事作業時間の検討

1. 炊事時間は田植、稲刈および耕起時期には若干長く、冬期農閑期にはかえって短くなる。夏期農閑期でもその傾向がある。したがって、農閑期だから炊事時間が長くなるということは認められない。全作業期の炊事時間と婦人の農業労働時間の間には相関は認められない(第2図)。炊事時間は本来、喫食数、献立



第2図 婦人の農業労働時間と炊事時間

内容、炊事手段および台所空間あるいは担当者の数などによって異なるものである。喫食数は主として家族人数によると思えるが、家族人数と炊事時間の関係は明確ではない。ただ、家族構成が複雑で炊事担当者が多い場合には若干長くなる傾向がある。しかも、担当者が老令である場合には長く、家族構成が単純で炊事担当者も少ない場合には短い傾向にある。しかし直系二夫婦で担当者が2人いる場合でも相対的に短い家もあり、また片親夫婦で中学生の子女が手伝っている農家の時間は相対的に長いことなどから、炊事時間の傾向はここでは定かでない。すなわち、炊事時間は農家

ごとに相対的に長い家、短い家があり、農閑期だから長くなるということは認められない。したがって、炊事時間は年間をとおして農家ごとに一定であり、時間はそれぞれに確保されているといえよう。

2. その他、婦人の農業労働時間と掃除時間とは相関は認められないが、洗濯時間とは $r = -0.38$ で低い相関が認められる。これに対し、裁縫時間とは $r = -0.62$ でかなりの相関が認められる。もちろん乳幼児のいる農家での育児時間は、婦人の労働時間と関係はない。

以上、おもなる家事について農業労働時間との関連で量的な面のみを考察した。先に述べたように農業労働時間と家事時間の間には、かなり高い相関が認められたが、炊事、育児、掃除では農業労働との関係はなく、洗濯では若干認められるだけである。家事時間との相関が高いといっても、それは主として裁縫によるものと思われる。というのは、家事時間から裁縫時間を除くと両者の相関は低くなる($r = -0.26$)からである。したがって裁縫を除く日常の家事、つまり炊事、掃除、洗濯、育児時間は農業労働時間に大きく影響されることなく、ほぼ一定時間さかれているといえよう。

5. 家事分担とその代替

家事の担当者は家事作業の内容のみならず、家族構成によって異なり、農作業の繁閑によって変化する。しかしおもなる担当者は主婦、母、嫁などの婦人によってなされていることはいうまでもない。家事はその大部分が誰でもがある程度担当できる作業であるために、これら担当者のほか、多くの家族員によって分担されている。たとえば、田植期の1農家の家事時間は820分であるが、その分担をみると経営主が一番多く(500分)、ついで嫁(170分)、主婦(150分)となっている。これは経営主が事故に遭遇し、怪我はほとんどなおったが、大事をとって田植には出役せず、

主婦に替わって子守りを担当したためである。子守りのほか昼食準備(30分)、庭掃き(40分)も行なっている。つまり主婦、嫁に替わって家事の一部を経営主が代替したわけである。このようなことはむしろ特殊であるが、農繁期には中学、高校にいてる子女が炊事、掃除などを全面的に肩代りして行なっている。このようにおもなる担当者に替わって子女あるいは男子が家事を代替することは農家ばかりでなく、非農家でも日常的にみられることで、家事作業では代替が容易に行なわれている。代替される家事は炊事、育児、掃除などである。とくに、炊事、育児時間が婦人の農業労働時間と無相関であったのは、これらの家事が家族にとって欠くことのできないものであるからであって、婦人たちが行なえない場合には誰かが替わって行なっている。家事作業者の代替は家事の緊要度との関連で行なわれると思われる。したがって、裁縫のように不急なもので、代替不能なものは相関が高くなるのである。

以上、家事時間および家事分担についてみたが、農家は農作業に対応させながら家事作業の一切を代替という形で行なわれているのである。それによって必要な家事時間は一応確保しているのであるが、これが家事作業からみた生活水準ともいえよう。農繁期以外は男子は出稼ぎ、日雇いに出るので、それ以外の時期の農作業は専ら婦人達が担当する。したがって家事の代替は農繁期ばかりでなく普通作業期にも行なわれる。農家の生活が一般に低位にあるのは、このような責任分担の不明確な代替が行なわれていることも1つの理由であろう。農繁期は今後も存在しよう。家事担当者は依然として農作業によって規制されるのであるし、農作業の省力化によっても、兼業によっても、農業生産の比重はこれら家事担当者に強くかかってこよう。家事作業はかえって強く圧迫されることになると思われる。